【霊総受け】間にお帰りなさい

【霊総受け】間にお帰りなさい【竹、武、犬、徳、鬼、神】

朱音

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=22313101

二次創作, 腐向け, モ腐サイコ100, 霊幻総受け

師匠総受け、総愛されwebイベント展示品。
2024.10.

※師匠の軽い怪異設定
・倫理観の崩壊
・擬人化怪異捏造♂
・ネームドキャラの家族の死
・モブキャラの大量死
・タヌキの怪異化
・モブキャラ(喋る)

◇これは、間(はざま)にのんびりと暮らす、人と怪異の日常である。

【怪異二人のキャラデ】
illust/113153124

感想頂けると跳ね飛んで喜ぶ妖怪です。
一言、長文、発狂？うぇるかむ(｀・ω・´)
マシュマロ：https://marshmallow-qa.com/hiiragi_syuin

【霊総受け】間にお帰りなさい【竹、武、犬、徳、鬼、神】

ここはあの世とこの世の間（はざま）、怪異と人間が暮らす場所。霊とか相談所を営む霊幻新隆も、人に捨てられ、アカグロサマとタヨリという、二人の怪異に拾われた。

これは、間（はざま）にのんびりと暮らす、人と怪異の日常である。

竹中桃蔵は人の心が聞こえる生贄だった。人の心が聞こえるから生贄になったと言ってもいい。誰も彼もが『自分でなければ誰でもいい』と考える声があまりにうるさかったから、生贄として名乗り出た。だが、生贄を求めていたはずの神だか怪異だかからは『いらない』と言われ、頭を抱えていたところを霊幻が拾ってくれた。
はざまは人間界から弾かれた竹中にとって意外と住み心地がよく、はざまにある学校に通いながら、霊とか相談所の手伝いをして過ごしている。
困った事や悩み事があれば怪異、人間、怪異と人間の間（はざま）に限らず相談に乗ってくれる霊幻に、惚れない者などいるのだろうか。今も、学校で出された宿題を相談所の応接セットに広げて見てくれている。任せろという言葉と得意げな表情の後、ずっと一緒に悩んでくれているその姿に嬉しくなった。
「助けてヨシフ先生！」
唸（うな）る顔が可愛くて見惚れていたところ、霊幻の言葉のすぐ後に相談所の扉が開く。現れたのは首からライターを下げる坊主頭の男、ヨシフ。彼が扉を開く前に気づいたのは、霊幻がアカグロサマとタヨリという二人の怪異に拾われ育てられたから。強力な怪異二人と過ごすうちに、軽い怪異化を果たしたらしい。知り合いなら扉が開く前に誰なのか分かったり、見た目と年齢が噛み合ってな

かったり、怪異としては弱いと言い切れる程度の力しかないけどな、とは本人の言葉だ。
先生役を頼まれたヨシフは霊幻、竹中、広げられた宿題セットを見比べた後、何かの書類を脇（わき）に挟んで腰を落とす。ヨシフの仲介役という立場を考えると、脇に挟んだ書類は霊幻が目を通す必要のある、ここと人間界に関する何かだと思われるが、どうやら先に教えてくれるらしい。
いいタイミングで先生を確保してご機嫌な霊幻との勉強会が済んだと思ったら、彼はすでに書類へ視線を落としていた。凄い男だなと思う。
じっと見つめてしまっていた竹中の視線に気づき、ヨシフが紙面に目を通している隙に「どうした？」と、優しいテノールが声をかけてくれた。
「素直に聞けるの凄いっすね」
「ヨシフ頭いいからな」
「知ってます。そうじゃなくて、霊幻さん、もしかしたらヨシフさんより長生きじゃないっすか」
「お前それ女性には言うなよ？」
「大見（おおみ）え切った後に分からないって認めて、見え切った本人の前で頼れるの、凄ぇなって」
「あれ？俺けなされてる？」
「褒めてるっす」
ヨシフが書類を確認しながら肩を揺らして笑う。
「変に意地張ったってこじれて疲れるだけだろ？分からない時は頼っていい、プライド高いだけだと視野も思考も狭（せば）まるだけだ。
ああ、頼るっていうのは必ずしも問題を解決するって事じゃないぞ？愚痴とか悩みとか、一人じゃ抱えきれなくなったもんを聞いて、寄り添ってもらう事も頼るって事だ」
お前は特に自分一人で悩み過ぎる、超能力の事だって、と続くのを、ヨシフが霊幻の頭に書類を置き「確かに預かった」と言って止めた。
「コラ」

ヒラリと片手を上げて去ったヨシフに霊幻の「助かった」が贈られる。
「霊幻さん」
「ん？」
「助かりました、ありがとうございます」
「おー、ヨシフにも言っとけよ？」
「もう伝えたっす」
「あー、あれか」
彼が去る間際、諜報も生業（なりわい）にする男の上げられた手のひらがピクッと小さく震えた事に、強力な能力者でない霊幻も気づいていた。
そんな関係を、それ以上の関係を、いずれ築けたらと思う。この"凄い男"を守れるくらい、頼られるくらいに、もっともっと、心身共に凄く、強く。

「筋肉が、足りていなかった！」
男の深く通る声が、大きな一軒家に響き渡る。
郷田武蔵は生贄だった。誰かが行かなければおさまらない、女子供、妻や子供のいる男、老人病人を行かせるという考えが、郷田にはなかった。なかったから、健康で力の強い自分が生贄になった。だが捧げた怪異に「要求した覚えはない」と言われ、しかしこのまま帰っては村の者たちが不安になるだろうと困っていたところを霊幻に拾ってもらった。
生贄になりきれず、村にも戻れなかった郷田に居場所をくれた霊幻と、よくしてくれるはざまの者たちに恩返しがしたい。学校に通いながら霊とか相談所を手伝い、肉体を鍛える事も怠（おこた）らない。にも関わらず出来ない事も多く、学ぶ事もある。
今も、広い家に一人で住んでいるお婆さんの手伝いをしていた。
もっと小さな家に引っ越すための家具整理と移動は、郷田と霊幻二人でどうにかなる量を超えていた。早く終わらせて、お婆さんを落ち着く場所で休ませてあげたかったのだが、休憩に出された茶と茶

菓子をいただくため座り込むと、疲労が一気に押し寄せる。自分にはまだまだ筋肉が足りていないという事か。思わず嘆き叫んだ声に、霊幻の静かな声が返った。
「いいと思うぞ、自分の限界を知ってもっと上をみるのも。ただ、そうだな……周りを見渡してみるのもいいと思う」
「周り……」
「こんにちはー！手伝いに来ました！」
「おー、こっちだこっち」
玄関を開けてすぐ、移動させた家具でちょっとした迷路になった土間から、見覚えのある男女が郷田達の休む居間に上がってくる。はざまに来てから知り合った筋肉仲間たちだ。
「たくさん来るって霊幻さんから聞いていたから、お菓子いっぱい作っておいたのよ。みんな遠慮しないで食べて」
立ち上がるお婆さんを座らせ、場所を聞いて取りに行くもの。同じく追加でお茶を淹れに行くもの。
みんな、郷田や霊幻、お婆さんの力になりたいから集まったのだと言う。
「一人じゃ大変な事はみんなでやったらいい、お前の助けになりたいと思う奴らを頼ってやったらいい。周りをよく見て、今の力で自分ができる事とできない事を見極める。それは恥ずかしい事じゃねぇよ」
ずず、とお茶をすすって熱さにふき出す霊幻が、郷田にはとても綺麗に見えた。

犬川豆太は怪異災害孤児だ。
開発の邪魔になると祠を壊された怪異が、犬川の住んでいた町の人間だけを片っぱしから焼いていった。犬川ともう一人だけ無事だったのは、怪異のお気に入りであるタヌキを助けた事があったから、という話を、はざまに住めるようにと手配してくれた霊幻から聞いた。
行くあてもないしと飛び込んだはざまは住み心地がよく、助けてす

ぐ車にひかれてしまったらしい怪異化したタヌキとも再会出来たので、悪くないと思っている。タヌキはどうやら誰かを恨んでいるなどではなく、助けてくれた犬川達に会いたくて怪異化したらしい。よくはざまの霊とか相談所に現れるので、犬川も霊幻とタヌキに会うために遊びに来る事が多い。
はざまの相談所でタヌキの顔と首周りをわしゃわしゃしゃ掻（か）いたり撫（な）でたりしていると、少しだけ人間界側の霊とか相談所に寄って来ると言って出ていった霊幻が、いい匂いをさせて帰って来た。
「お帰りなさ……なんすかそれ」
「焼き芋だ、常連さんからもらった」
「あざっす」
自然に大きく割られた片方を受け取り、更に小さくしてから冷ましタヌキに差し出す。犬川の指に歯を立てないよう器用に食べたタヌキがもっととねだってくるので、自分でも一口かじり、また小さく割ってを繰り返した。
その間に食べ切った霊幻がどこからか濡れティッシュを持ってきたので、後で使わせてもらおう。
「犬川君達が来るとタヌ公（こう）いつもより嬉しそうなんだよなぁ」
「変わらなくないっすか？」
「いやいや。やっぱり助けてもらったし、君達が優しいの分かるんだろうなぁ」
「普通っすよ」
「犬川君が心底その優しさを普通だと思ってるの、凄い事だと思うぞ」
自分より年下の子供を、なんでもない事のように素直に認めて褒（ほ）める。それはどれだけ大変な事だろう、どれだけ難しい事だろう。

「霊幻さんの方が凄いっすよ」

照れ臭くて、茶化したようにしか言えなかった犬川に「サン

キュー」と笑う表情はとても、とても……綺麗だった。

徳川光と犬川豆太は同じ町の出身で、同じ怪異災害孤児だ。
欲に駆られた町の人間が祠を壊し、怪異が大量の人体発火を引き起こした。逃れたのは徳川と犬川の二人で、たまたま、怪異のお気に入りであるタヌキを助けたから。そのタヌキは助けた直後、命を落とし怪異になった。恨みなどではなく、助けてくれた徳川達に会いたくて怪異化したらしい。そんなタヌキと、行くあてのない徳川が不自由なく暮らせるよう手配してくれた霊幻のいるはざまは、思っていたよりも住みやすかった。
住人のほとんどが霊幻と、その育ての親である怪異、アカグロサマとタヨリに助けられ、彼らを信頼している。共通して、彼らが大事にしているはざまを自分達も大事にしよう、という認識があるのだ。何かあれば彼らは話を聞いてくれるし、手を貸してくれる。はざま同様、大事にしてくれる。そうして過ごしているうちに、彼らのためにも、と思って大切にしていたはざまは、自分自身が大切にしたい、という故郷への想いに成っていく。
徳川も、何かはざまに返せるものはないか、霊幻に返せるものはないかと考え、人間と怪異が通う学校の生徒会のようなものをしている。人間も怪異も自分自身、個人の考えがあるのだから、衝突する事もあれば不満も上がり、それらの間に立つ役が必要だ。しかしどうしても自分は人間であり、怪異達の訴えを理解出来ない事も多い。今日も学校での事をあれこれ考えながら、結局は霊幻の助言を求めて霊とか相談所を訪ねてしまった。扉を開くと、腹部に大きな毛玉が突進してきたので、落ちて怪我をしてしまわないように受け止める。
一瞬呼吸が止まった。落とさなかった自分を褒めたい。
毛玉を下ろしてわしゃわしゃと撫でてやりながら、タヌキってこういうものなのだろうか、それとも怪異化しているから突進してくるのだろうかと考える。

分かるはずがなかった。

「おーい、徳川君？」
呼ばれて顔を上げると、苦笑しながら片手を上げる霊幻がいた。
「申し訳ない！お邪魔します霊幻さん」
「おー」
挨拶がどうこうというよりは、自分が放っておかれたのが寂しくて声をかけたのだろう。徳川は言わずとも礼を欠くような人間ではないと分かっているからこそ、謝った相手を重ねて注意するような事はしない。
「あ、そうだ！さっき丁度お婆ちゃ……依頼人が来てな。依頼ついでにフキ菓子、フキに砂糖を絡めたやつ持ってきてくれたんだよ。沢山作っておいたものらしくてさ。色んなヤツの感想伝えたいから一緒に食おうぜ」
「いただきます」
沢山撫でられ、ふんすふんすと満足そうなタヌキから手を離し、給湯室で手を洗わせてもらう。ついでにお茶を淹れて戻ってくると、応接セットのテーブルに、タッパーから紙皿に出されたフキ菓子が置かれていた。元の入れ物である大きめのタッパーは、テーブルの中央を避け置かれ佇（たたず）んでいる。
「沢山あるからな、腹壊さない程度に好きなだけ食べていいぞ」
「霊幻さんも」
「つい食い過ぎちまうんだよなぁ」
口に含んで噛むと、仄（ほの）かな苦味と優しい甘味か広がり、柔いフキの香りが鼻を抜けていく。それをぬるめのお茶で流し味わい、一息。
「美味しいですね」
「だよな、伝えとくわ」
自分の事のように喜ぶ霊幻さんの笑顔と、優しい味の菓子と、温かいお茶。
この人なら大丈夫、この空気なら大丈夫。
「霊幻さん、相談が」
「どうした？」

ほぐれた心が、口から不安を吐き出させた。
人間と怪異が混在する学校での事だ。人間同士ですら揉めるのだから、身も心も未成熟、年齢もバラバラな人間と怪異の子供同士で揉めないはずもなく、徳川のいる生徒会はよくそういった事の仲裁にも出向く。人間ならば人間である徳川にも対処可能なのだが、怪異の子供となると徹底して話が噛み合わない事も多い。
例えば人間と怪異で揉めた場合、怪異と怪異で揉めた場合、どちらか一方に肩入れしてしまっていないかという不安が付いてまわる。
怪異達を知る努力はしているが、すぐにその思考や行動原理を理解するのは難しい。どうしたものかと悩み抜いた末、結局、昔からはざまで怪異と共に暮らす霊幻に話を聞いてみるしか思い浮かばないところまで来てしまった。
「生徒会を作るって話してもらった時、俺は人間と怪異、半々でって言ったよな」
「はい、パワーバランスと……平等に、という事かと」
「それもあるが、一番は"頼るため"だ」
「頼るため……怪異絡みの事を怪異の子に、という事ですか。でも人間で生徒会である自分が少しでも早く理解しなければ」
「すぐには無理だろ、人間同士だって難しいのに。一人で気負い過ぎなくていいって事だ」
俺を見ろよ、みんなに頼りっぱなしだ。そい言って苦笑する瞳は穏やかで、頼り、学び、相手が困っていたら頼っていいと手を差し伸べるそれは悪い事ではないのだと、心の底から信じさせてくれる。
「それに怪異達だってほとんどが人間から発生してる、根源は人間の感情だ。その観察眼があればきっと分かるし、学校のヤツらだって、分かろうとしてくれる努力をちゃんと見てるもんさ」
大丈夫。
怯（ひる）んだ背中を無理に押すでもなく、強引に手を引くでもなく、ただ寄り添い、肩の力を抜けと優しくも力強く叩いてくれる。

「ありがとうございます」
拾ってくれて。
「おう、まぁ少しはゆるく長くやってみろ」

「はい」
はざまに連れて来てくれて。
居場所をくれて。
本当に。

なんて眩（まぶ）しい。

これは憧れか、それとも――――。

――――

鬼瓦天牙は間引きされた。
ふざけた事をと思ったヤツは真っ当だし、自分を間引きした集落のヤツらも真っ当だと思う。ギリギリで食い繋いでいるど田舎すら超えるさびれた集落が、自分のようなどうしようもない乱暴者に出ていってくれと頼むのは当たり前だった。鬼瓦も、自分が追い出す側になるのはムナクソ悪い。そんな気持ちになるくらいならば一人で出て行ってのたれ死んだ方がマシだと思ったのだ。
ただ、腹が減る。雨風をしのげない。安心して眠れない。

苦しい、ツライ、つらい、にくい、ニクイ。

結局、誰か、何かを呪い、苦しみながら死んでいく事になったのは失敗したというか、少し考えれば分かるだろうに、我ながら馬鹿だったというか。そんな事を考えながら、重い体を引きずるように踏み越えた山境（やまざかい）は、たまたま、昔からお地蔵様がいた場所だった。

空気が変わった。

優しく包むような気配に力が抜けて倒れ込みながら、「大丈夫か」という男の声を聞いた。それは、鬼瓦がはざまと呼ばれる場所で生きていけるように手配してくれた命の恩人、霊幻新隆の声だった。
根気強く助けてくれた彼とはざまに少しでも恩返しがしたくて、苦

手な学校にも通い、勉強もしている。思っていた何倍も過ごしやすいそこは、人間と怪異の生徒が通う場所で、年齢も性別も種族もバラバラだったが、共通して、鬼瓦を見た目で嫌うものはいなかった。
子供たちにはよく懐かれ困惑していると、通りすがった霊幻に「怪異は人間の本質を見るのが得意だからなぁ、根が素直で優しいヤツにはよく懐く」と微笑まれた。邪魔なら伝えるがと言われてとっさに断ったのは、なんとなく、子供たちはただ無邪気に好いてくれているのだろうと分かったから。
「こんなちっこいのが何人いようが邪魔になんてならねーっすよ」
思わずそらした視線に「そうか」と満足そうな優しい声。どんな顔でと振り向いた時には、こちらに背を向けて片手を上げていた。
「むずむずすんな」
「おにーちゃんだいじょうぶ？」
「てんが、おなかいたい？」
「心配すんな、俺は強ぇからこんくらい大丈夫だ！」
不安そうな子供たちを腕にぶら下げて回ってやると、きゃらきゃらと楽しそうな声が上がる。
「お前らは元気に笑ってんのが一番よ」
釣られて笑った自分に霊幻の微笑みが重なる。あの人には、自分もこう映っているのか、と。

やっぱ腹が痛ぇ、変なモン食ったかな。

神室真司は神隠しにあった。正確には、神隠しにあったのだと間引きされた。
優秀な家族の中で、一番できの悪い真司が神隠しという名で間引きされたのは、何もおかしな事ではない。動物だって弱い個体は間引かれる。ただ、せめて自我のない内に終わらせて欲しかったと思った程度だ。見て分かる疾患があった訳でもないので分かりにくかったのだろうが。人間は、勉強ができるできない、芸術やスポーツの

才能が有る無しをすぐに判断できる生き物ではない。
その辺りを仕方がないと諦めるにしても、お山をさまよっていれば腹は減る、身体は疲れる。餓死とは苦しいものだ、凍死も自殺も怖い。風邪でもひいて高熱にうなされながら死ぬにしても、やはりツライ。
残念な事に自我を持ったまま生きているのだ。狂うに狂いきれず、神隠しである以上、お山を下りる事も出来ない。途方に暮れていたところを、霊幻が拾ってはざまに居場所をくれた。血の繋がった家族から捨てられた、何の取り柄もないさえない子供を。
霊幻もはざまの住人も、荒れて心を閉ざしていた自分を気にかけ、声をかけ続けてくれた。血の繋がりどころか種族すら違う、人間の子供に。
そんな彼らに情が湧き始め、興味があればはざまにある学校に通ったらどうかと勧められた頃。霊幻から、家族が天災で全滅した事を聞いた。なんとも思えなかった自分に、結局、同じ血が流れているのだなと幻滅した。そこへ兄が、兄の幽霊が会いに来た。さまよっていたところを霊幻が見つけて連れて来てくれたらしい。今更会って何を話せばと思いながら、何かを期待していたのだろう。霊幻にその背中を押されて話してみると、真っ先に謝られた。

すまなかった、と。

謝られたところで何かが変わるわけではない。それどころか、兄の気が済むだけではないかとさえ思った。その日は一言だけ、家族で一番できのいい兄が、家族で一番できの悪い自分に、腰を折って深々と頭を下げて行った。
それから時々、幽霊の兄は真司の住むはざまの家に顔を出した。ひたすら謝る時もあったし、ただ後悔を連ねて行く時もあった。何も言わない自分に顔を歪（ゆが）める事はあっても、責めず、焦らず、真摯（しんし）に向き合い続けた。霊幻がいる時は一緒にいてもらったが、彼も何かするではなく、普段と変わらず真司にも兄にも接してくれた。
そんな日々が続いたある日、少しでもお世話になったはざまに恩返

しをと、学校で生徒会のようなものをしていると、人間と幽霊の間で揉め事が起こった。人間同士でだって起こるのだから、多種が勉学に励む場ならば当然だ。
何でも頼る事になってしまうのは申し訳ないと思いつつ霊幻に相談すると、幽霊の事は幽霊を頼ってみるといい、と兄を紹介された。
結果的に解決してめでたしめでたしなのだが、思い知らされた。
自分は家族を、兄を好きだったのだと。
許せるものなら許したかった。許しては、自分の苦しみが報われないのではないかと思っていた。何も感じないと思うしかなかった。
実際、許さなくてもいいのだろう。感情なんて白か黒かだけで割り切れるものでもない。
ただ、真司が苦しみ続ける必要もないだろうと、見抜いていた霊幻が許す機会をくれた、それだけの事だ。
それだけの事が、家族を愛した末に捨てられた真司にとって、心の底から救いになった。それだけの事を、億といる人間の中で一体何人が行動に移せただろう。
自分も捨てられて、アカグロサマとタヨリという怪異二人に拾ってもらった。なんとなくこうした方がいいんじゃないかと思っただけで俺は何もしていないよと、兄と共にお礼を言う自分達に霊幻が笑った。
その笑顔が、雨上がりに差す木漏れ日のようで。

神室真司にとってそれは、このひとの隣に立ちたい、大切にさせて欲しいと思うには、十分な温もりを抱いていた。

ここはあの世とこの世の間（はざま）、怪異と人間が暮らす場所。
霊とか相談所を営む霊幻新隆と、彼を拾った怪異、アカグロサマとタヨリに救われたものたちが集うところ。
これは、間（はざま）にのんびりと暮らす人と怪異の日常であり、

彼らに助けられたものたちが、霊とか相談所を手伝いながら過ごす

物語である。

+++

【間（はざま）にお帰りなさい】